

【八】<sup>2</sup><sup>4</sup><sup>5</sup><sup>6</sup>六共兵具

親字	音訓	甲骨文・金文・古文 (殷・西周・春秋・戦国)	説文解字 篆文	隸書 (秦・前漢・後漢)	草書	行書	楷書 (南北朝から初唐)	正字体 楷書	日本上代 から 平安初期
六	ロク むい むつ むつ	𠩺 𠩻 𠩼	𠩺	𠩺 𠩻 𠩼	𠩺 𠩻 𠩼	𠩺 𠩻 𠩼	𠩺 𠩻 𠩼	𠩺 𠩻 𠩼	𠩺 𠩻 𠩼
教1常①		甲骨 包山楚簡 睡虎地秦簡 泰山刻石	泰山刻石	馬王堆 乙瑛碑 十七帖	王羲之 黄庭経 龔龍顔碑 孔子廟堂碑	五経・序	王勃詩序		
		𠩺 𠩻 𠩼	𠩺	𠩺 𠩻 𠩼					
		𠩺 𠩻 𠩼	𠩺	𠩺 𠩻 𠩼					
共	キョウ とも	𠩺 𠩻 𠩼	𠩺	𠩺 𠩻 𠩼	𠩺 𠩻 𠩼	𠩺 𠩻 𠩼	𠩺 𠩻 𠩼	𠩺 𠩻 𠩼	𠩺 𠩻 𠩼
教4常①		甲骨 金文 楚帛 郭店楚簡	説文篆文	馬王堆 曹全碑 淳化閣帖	集字聖教序 帛比干墓文 雁塔聖教序	干祿・序	杜家立成		
		𠩺 𠩻 𠩼	𠩺	𠩺 𠩻 𠩼					
		𠩺 𠩻 𠩼	𠩺	𠩺 𠩻 𠩼					
		𠩺 𠩻 𠩼	𠩺	𠩺 𠩻 𠩼					
兵	ヘイ ヒョウ つわもの	𠩺 𠩻 𠩼	𠩺	𠩺 𠩻 𠩼	𠩺 𠩻 𠩼	𠩺 𠩻 𠩼	𠩺 𠩻 𠩼	𠩺 𠩻 𠩼	𠩺 𠩻 𠩼
教4常①		甲骨 金文 古匱 郭店楚簡	説文篆文	銀雀山竹簡 孔宙碑 大観帖	大観帖 張猛龍碑 孔子廟堂碑 開成石経	瑠玉集			
		𠩺 𠩻 𠩼	𠩺	𠩺 𠩻 𠩼					
		𠩺 𠩻 𠩼	𠩺	𠩺 𠩻 𠩼					
		𠩺 𠩻 𠩼	𠩺	𠩺 𠩻 𠩼					
		𠩺 𠩻 𠩼	𠩺	𠩺 𠩻 𠩼					
		𠩺 𠩻 𠩼	𠩺	𠩺 𠩻 𠩼					
		𠩺 𠩻 𠩼	𠩺	𠩺 𠩻 𠩼					
具	グ そなえる そなわる つぶさに	𠩺 𠩻 𠩼	𠩺	𠩺 𠩻 𠩼	𠩺 𠩻 𠩼	𠩺 𠩻 𠩼	𠩺 𠩻 𠩼	𠩺 𠩻 𠩼	𠩺 𠩻 𠩼
教3常①		金文 石鼓文 説文篆文	説文篆文	馬王堆 史晨前碑 魯近帖	魯近帖 元詮墓誌 伊闕仏龕碑	干祿・序	王勃詩序		
		𠩺 𠩻 𠩼	𠩺	𠩺 𠩻 𠩼					
		𠩺 𠩻 𠩼	𠩺	𠩺 𠩻 𠩼					
		𠩺 𠩻 𠩼	𠩺	𠩺 𠩻 𠩼					
		𠩺 𠩻 𠩼	𠩺	𠩺 𠩻 𠩼					
		𠩺 𠩻 𠩼	𠩺	𠩺 𠩻 𠩼					
		𠩺 𠩻 𠩼	𠩺	𠩺 𠩻 𠩼					
		𠩺 𠩻 𠩼	𠩺	𠩺 𠩻 𠩼					

平安中期 から 室町	江戸版本	康熙字典 1716年 部首・画数	弘道軒 四号	夏目漱石 坊っちゃん 明治39年	通用体活字 明治41～ 大正3年	漢字 整理案 大正8年	文部省 活字 昭和10年	当用 漢字表 昭和21年	太宰治 人間失格 昭和23年	当用漢字 字体表 昭和24年	教育漢字 平成4年	参考
六	六	六	六	六			六	六	六	六	六	六
元暦萬葉①	節用	八2										現代中国
共	共	共	共	共			共	共	共	共	共	共
粘葉本朗詠	節用	八4										現代中国
		𠩺										
兵	兵	兵	兵	兵			兵	兵	兵	兵	兵	兵
粘葉本朗詠	節用	八5										現代中国
	兵											
具	具	具	具	具	具	具	具	具	具	具	具	具
元暦萬葉①	出世太平記	八6										現代中国

【六】説文篆文の字体はちょっとおかしい？ 現代中国も「具」。

【兵】現在の字体で書かれるようになったのは、中国の南北朝期あたりらしい。

【具】中国の南北朝期以降は「具」ではなく「具」と書かれることが多い。干祿字書、九経字様、康熙字典、文部省活字、

※当用漢字字体表の下の○×は、複数の字体がある字種のうち昭和24年当時、岩田母型製造所での母型の有無を示す。

親字	音訓	甲骨文・金文・古文 (殷・西周・春秋・戦国)	説文解字 篆文	隷書 (秦・前漢・後漢)	草書	行書	楷書 (南北朝から初唐)	正字体 楷書	日本上代 から 平安初期
其	キ その								人①
典	テン さかん つかさどる のり								教4常①
兼	ケン かねる かねて								常①
円	エン まるい まどか まる								教1常①
圓									人②

【其】『説文解字』『甲骨文編』『金文編』に「其」では掲載されず、「箕」として掲載。『甲骨文編』『金文編』などをまとめた『古典文字字典』には「其」は「箕」の籀文とある。白川静は「其」は「箕」の元の字としている。  
【兼】楷書では下部が「灬」になる字体が一般的。干禄字書の

序文には2種類の字体が使われている。  
【円】「円」の字体は中国では使用例が見えない。日本では空海の「三十帖策子」に使用例があり、その後ずっと使われ続けている。「円」は「圓」の「員」を縦線に略してできた字体だと思われる。弘道軒に「圓」の字体が見えない。「圓」は楷

平安中期 から 室町	江戸版本	康熙字典 1716年 部首・画数	弘道軒 四号	夏目漱石 坊っちゃん 明治39年	通用体活字 明治41~ 大正3年	漢字 整理案 大正8年	文部省 活字 昭和10年	当用 漢字表 昭和21年	太宰治 人間失格 昭和23年	当用漢字 字体表 昭和24年	教育漢字 平成4年	参考
其	其	其	其	其			其					其 現代中国
其	其	其	其	其								
其	其	其	其	其								
其	其	其	其	其								
典	典	典	典				典	典	典	典	典	典 干禄<俗> 現代中国
		典										
		典										
		典										
		典										
		典										
		典										
兼	兼	兼	兼	兼	兼	兼	兼	兼	兼	兼	兼	兼 現代中国
兼	兼	兼	兼	兼	兼	兼	兼	兼	兼	兼	兼	
兼	兼	兼	兼	兼	兼	兼	兼	兼	兼	兼	兼	
兼	兼	兼	兼	兼	兼	兼	兼	兼	兼	兼	兼	
兼	兼	兼	兼	兼	兼	兼	兼	兼	兼	兼	兼	
圓	圓	圓	圓	圓	圓	圓	圓	圓	圓	圓	圓	圓 現代中国
圓	圓	圓	圓	圓	圓	圓	圓	圓	圓	圓	圓	
圓	圓	圓	圓	圓	圓	圓	圓	圓	圓	圓	圓	
圓	圓	圓	圓	圓	圓	圓	圓	圓	圓	圓	圓	
圓	圓	圓	圓	圓	圓	圓	圓	圓	圓	圓	圓	

書では「員」の「口」を「ム」または「△」に書く。これは四角の連続を避けて変化をつける意識が働いているのかもしれない。「口」を点2つに略するのは漢代から行われているが、「口」を点2つに略するのは鎌倉時代以降か。



親字	音訓	甲骨文・金文・古文 (殷・西周・春秋・戦国)	説文解字 篆文	隸書 (秦・前漢・後漢)	草書	行書	楷書 (南北朝から初唐)	正字体 楷書	日本上代 から 平安初期
冒	ボウ おかす おおう 常①								冒 伝空海
冂	ジョウ 常①								冂 王勃詩序
宀									
写	シャ うつす うつる 教3常①								写 杜家立成
									写 杜家立成
冠	カン かんむり 常①								冠 璣玉集
									冠 璣玉集
冥	メイ ミョウ 新①								冥 王勃詩序
									冥 王勃詩序
									冥 王勃詩序
									冥 王勃詩序

【冂】多くの場合、漢和字典では「冂」の部に掲載されているが、書道字典では「冂」の部に「冂」の字体で掲載されている。説文篆文に従えば「冂」になるはず。五経文字には「冂」の部に「冂」の字体のみ掲載され、しかも「冂」との違いについて説明されている。康熙字典には「冂」の部に「冂」が

あり、「冂と同じ」とある。「冂」の部にも「冂」があるが、そこには「冂」についての記述はない。漱石は「冂」と「冂」の両方を書いている。畏るべし漱石。  
【写】本来は「冂」の字らしい。「冂」や「冂」を「冂」としたり、「冂」の「冂」を「冂」としたり、「冂」の最終画を横

平安中期 から 室町	江戸版本	康熙字典 1716年 部首・画数	弘道軒 四号	夏目漱石 坊っちゃん 明治39年	通用体活字 明治41~ 大正3年	漢字 整理案 大正8年	文部省 活字 昭和10年	当用 漢字表 昭和21年	太宰治 人間失格 昭和23年	当用漢字 字体表 昭和24年	教育漢字 平成4年	参考
												冒 現代中国
												冂 現代中国
												写 現代中国
												写 現代中国
												冠 現代中国
												冥 現代中国

に伸ばして「冂」っぽくなる字体の出現は南北朝期から。当用漢字の字体は手書きでは江戸期から使われている。  
【冠】「元」の最終画が右に伸びて「冂」のようなのは唐代に入る頃から。南北朝期までは「元」の最終画は短くはねていた。それが「冂」に間違われ、さらに「冂」に誤つ

た字体がある。日本上代には「冂」を「冂」とする字体があるが、江戸期の版本には見えない。  
【冥】2011年に人名用漢字から常用漢字に出世した字。隸書の時代に「冂」の他に「冂」が出現。南北朝期に「冂」が出現。説文篆文に倣えば「冂」が正字体。







親字	音訓	甲骨文・金文・古文 (殷・西周・春秋・戦国)	説文解字 篆文	隸書 (秦・前漢・後漢)	草書	行書	楷書 (南北朝から初唐)	正字体 楷書	日本上代 から 平安初期
凶	キョウ わるい 常①								性霊集
凹	オウ くぼみ くぼむ 常①								
出	シュツ スイ だす でる 教1常①								王勃詩序
凸	トツ 常①								
函	カン はこ 人①								畫圖識文
函	②								伊都内親王願文
									性霊集
刀	トウ かたな 教2常①								王勃詩序
刃	ジン は やいば 常①								法隆寺獻物張
刃	②								
刃									上孫家筆漢簡

【凹】ほとんどの書道字典には不掲載だが、唯一『五體字類』第三版に「懷素」が掲載されている。

【出】「山」が2つと解する字体は南北朝期に出現するが、この字体は九經字様では「訛」としている。『陸軍幼年学校用字便覧』では「山」の下に「々」を配する字体が掲載されてい

るが、実際の使用例は未見。「山」の下に点を2つ書く例は近世の文書に使用例がある。

【凸】ほとんどの書道字典には不掲載だが、唯一『五體字類』第三版に「宋人」の書として1例掲載されているが、出典が確定できないので本書には載せなかった。

平安中期 から 室町	江戸版本	康熙字典 1716年 部首・画数	弘道軒 四号	夏目漱石 坊っちゃん 明治39年	通用体活字 明治41~ 大正3年	漢字 整理案 大正8年	文部省 活字 昭和10年	当用 漢字表 昭和21年	太宰治 人間失格 昭和23年	当用漢字 字体表 昭和24年	教育漢字 平成4年	参考
												兇 凶 江戸千祿(通) 現代中国
												凹 凹 唐懷素 現代中国
												出 出 九經(訛) 現代中国
												凸 凸 現代中国
												函 函 現代中国
												刀 刀 現代中国
												刃 刃 現代中国

【函】説文篆文には2種の字体がある。1つは「マ+口+彡」、もう1つは「肉+今」の字体。「マ+口+彡」と「函」は字体が一致しない。白川静説では「マ+口+彡」と「函」は元々は別字で、発音が同じために混用されたとする。「肉+今」に合致する字はみつけれない。日本の人名用漢字の字体は康

熙字典に由来し、現代中国の字体は唐代の楷書に由来するようだ。

※当用漢字字体表の下の○×は、複数の字体がある字種のうち昭和24年当時、岩田母型製造所での母型の有無を示す。

親字	音訓	甲骨文・金文・古文 (殷・西周・春秋・戦国)	説文解字 篆文	隸書 (秦・前漢・後漢)	草書	行書	楷書 (南北朝から初唐)	正字体 楷書	日本上代 から 平安初期
刈	ガイ かる	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎 𠄎		
茹	①	𠄎	𠄎				𠄎		
乂	②								
切	セツ サイ きる ぎれる		切	切	切	切	切 切 切 切 切	切 切	
分	フン・ブ ブン・わか つ・わか れ・わか れる・わか ける	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎	𠄎 𠄎	
刊	カン きる けずる		刊	刊	刊	刊	刊 刊 刊 刊	刊 刊 刊	

【刈】「刈」「茹」「乂」は異体字。もともとは「乂」でそれに「刀(刂)」がついて「刈」となり、さらに「艹」がついて「茹」になったようだ。康熙字典には「茹」が見えない。「乂」が「ヌ」になる場合が多い。

【切】偏は説文篆文では「七」。干禄字書ではなぜか「土」。九

経字様では「七」。通用体では「十」が多い。これは干禄字書では〈通〉、九経字様では〈訛〉とされている。漱石は「土」「七」の両方を書いている。もしかしたら漱石は干禄字書を見ていたのではないだろうか。

【分】この字の「刀」は南北朝期あたりに書き順と字体が変わ

平安中期 から 室町	江戸版本	康熙字典 1716年 部首・画数	弘道軒 四号	夏目漱石 坊っちゃん 明治39年	通用体活字 明治41～ 大正3年	漢字 整理案 大正8年	文部省 活字 昭和10年	当用 漢字表 昭和21年	太宰治 人間失格 昭和23年	当用漢字 字体表 昭和24年	教育漢字 平成4年	参考
刈	刈	刈	刈	刈			刈 刈	刈				刈 現代中国
茹	茹		茹									茹 現代中国
乂		乂										乂 現代中国
切	切		切	切	切	切	切 切 切 切 切	切 切 切 切 切	切	切	切	切 干禄<通> 現代中国
分	分		分	分	分	分	分 分 分 分 分	分 分 分 分 分	分	分	分	分 干禄<通> 現代中国
刊	刊		刊	刊	刊	刊	刊 刊 刊 刊	刊 刊 刊 刊	刊	刊	刊	刊 現代中国

る。草書の書き方の影響を行書、楷書が受けたのだろうか。その字体は干禄字書で〈通〉とされている。この字は文字通り分けるのだから、本来、上部の屋根がくっついてはいけない。くっつく字体は江戸に現れる。そのいけない字体を漱石が踏襲しているが、同時に草書の字体も使っている。

※当用漢字字体表の下の○×は、複数の字体がある字種のうち昭和24年当時、岩田母型製造所での母型の有無を示す。

親字	音訓	甲骨文・金文・古文 (殷・西周・春秋・戦国)	説文解字 篆文	隸書 (秦・前漢・後漢)	草書	行書	楷書 (南北朝から初唐)	正字体 楷書	日本上代 から 平安初期
刑	ケイ のり								
刑									
刑									
列	レツ つらなる つらねる								
列									
列									
列									
初	ショ うい・そめ る・はじめ はじめて・ はつ・うぶ								
初									
初									
判	ハン バン わける								
判									
判									
別	ベツ わかれる								
別									
別									

平安中期 から 室町	江戸版本	康熙字典 1716年 部首・画数	弘道軒 四号	夏目漱石 坊っちゃん 明治39年	通用体活字 明治41~ 大正3年	漢字 整理案 大正8年	文部省 活字 昭和10年	当用 漢字表 昭和21年	太宰治 人間失格 昭和23年	当用漢字 字体表 昭和24年	教育漢字 平成4年	参考
刑	刑	刑	刑	刑	刑		刑	刑	刑	刑		刑
		刑			判							判
		刑			刑							
列	列	列	列	列	列		列	列	列	列		列
初	初	初	初	初			初	初	初	初	初	初
									別			
判	判	判	判	判	判		判	判	判	判	判	判
別	別	別	別	別	別		別	別	別	別		別

【刑】書道字典には「刑」と「井+リ」を別字としているものと、異体字としているものがある。本書では後者の説を採った。ちなみに説文も、康熙字典も別字としている。説文篆文の偏が「井」の字体は他に見えない。  
【初】南北朝から誤って示偏が書かれることが多くなる。法

華義疏では偏に「禾」を書いている。江戸版本では示偏が圧倒的で、衣偏の使用例がみつからないほど。漱石は示偏を書いている。法輪寺切は示偏だとしてもおかしい字体。  
【判】偏の縦線は唐代まではまっすぐに書き、左に流すものではなかったようだ。左に流している例が確認できるのは北

宋。日本でも上代ではまっすぐに書いている。康熙字典はまっすぐだが、現代中国の印刷字体は左に流している。日本の印刷字体ではまっすぐなのと左にながす例が半々くらいだった。文部省活字も当用漢字表も左に流している。  
【別】古代の字を見ると偏は「高一口」で、馬王堆まではその

字体を書いている。九経字様では偏が「高一口」の字体を説文、「別」を隸省としている。偏の下部を「力」とする字体が南北朝時代からあり、我が国でも上代の王勃詩序はその字体を書き、その後もその字体が優勢。現代中国でも偏の下部を「力」とする。

親字	音訓	甲骨文・金文・古文 (殷・西周・春秋・戦国)	説文解字 篆文	隸書 (秦・前漢・後漢)	草書	行書	楷書 (南北朝から初唐)	正字体 楷書	日本上代 から 平安初期
利	リきく ずるとい								
券	ケン わりふ								
刻	コク きざむ とき								
刷	サツ ずる はく ほけ								
刺	シ ささる さす そし とげ								
制	セイ おさえる								
到	トウ いたる								

【刻】説文篆文、五経文字、康熙字典の一画目は共に横線。智永千字文の行書、瑠玉集や粘葉本朗詠では3～4画の書き順が現在小学校で教えられているのとは逆である。楷書もこのような書き順で書かれていたのかもしれない。智永千字文の行書は偏の最終2画が「冫」の最終2画のように上の方に書

かれている。通用体活字と漢字整理案に異体字があるが、これは智永千字文の行書のように書かれたものを見誤ったものだろう。宋元以来俗字譜にもこのような異体字が見える。康熙字典の古文は根拠を確認できない。

【刺】睡虎地秦簡や漢以降に書かれた字体を見るかぎり、説文

平安中期 から 室町	江戸版本	康熙字典 1716年 部首・画数	弘道軒 四号	夏目漱石 坊っちゃん 明治39年	通用体活字 明治41～ 大正3年	漢字 整理案 大正8年	文部省 活字 昭和10年	当用 漢字表 昭和21年	太宰治 人間失格 昭和23年	当用漢字 字体表 昭和24年	教育漢字 平成4年	参考
利												利 現代中国
券												券 現代中国
刻												刻 現代中国
刷												刷 現代中国
刺												刺 現代中国
制												制 現代中国
到												到 現代中国

篆文の字体は誤りなのではないか。



親字	音訓	甲骨文・金文・古文 (殷・西周・春秋・戦国)	説文解字 篆文	隷書 (秦・前漢・後漢)	草書	行書	楷書 (南北朝から初唐)	正字体 楷書	日本上代 から 平安初期
劍	ケン つるぎ								王勃詩序
劍	人②								瑞玉集
劔									性霊集
劔									性霊集
剛	ゴウ かたい こわい つよい								金剛場陀羅尼經
									金剛場陀羅尼經
									最澄 空海請来目録
									最澄 空海請来目録
									最澄 空海請来目録
劑	ザイ								東大寺獻物帳
劑									空海 三十帖策子

【劍】「劔・劍・劔・劔・劔・劔・劔・劔」などの異体字がある。金文では「金+劍」、睡虎地秦簡では「劍+刀」、説文篆文では「劍+刃」、説文籀文では睡虎地秦簡と同じ「劍+刀」の字体である。つまり篇と旁の左右の位置が変わることはあるが、部品としては必ず「劍」が付き、一方の部品に「金」

「刀」「刃」の3種類がある。この4種類の部品による3種類の組み合わせがこの字の基本的な字体のバリエーションである。4つの部品にそれぞれ書き方のバリエーションがあるために異体字が増えてしまったようだ。日本の平安時代初期に「金+刃」の字体が出現するが、これは「劍」を「金」と見

平安中期 から 室町	江戸版本	康熙字典 1716年 部首・画数	弘道軒 四号	夏目漱石 坊っちゃん 明治39年	通用体活字 明治41~ 大正3年	漢字 整理案 大正8年	文部省 活字 昭和10年	当用 漢字表 昭和21年	太宰治 人間失格 昭和23年	当用漢字 字体表 昭和24年	教育漢字 平成4年	参考	
													劍 現代中国
													劔 現代中国
													劔 現代中国
													劔 現代中国
													剛 現代中国
													剛 現代中国
													剛 現代中国
													剛 現代中国
													劑 現代中国
													劑 現代中国

間違えた誤字か、あるいは「金+刃」として新たに作られた会意文字であろう。「劔」の部分の部分を現在のように書くようになったのは中国では宋代、日本では鎌倉時代からのようだ。【剛】最澄が、旁を「寸」とする字体を書いている。空海も灌頂記でこの字体を書き、後に藤原忠親もこの字体を書いている。

これは中国には例のない異体字である。現代中国の字体には偶然かもしれないが古代文字の字体を生かされている。

親字	音訓	甲骨文・金文・古文 (殷・西周・春秋・戦国)	説文解字 篆文	隸書 (秦・前漢・後漢)	草書	行書	楷書 (南北朝から初唐)	正字体 楷書	日本上代 から 平安初期
剥	ハク・ホク はかま・とる はがれる・ はぐ・はげる ・むく	𠄎	𠄎	剥	剥	剥	剥	剥	剥
剥			𠄎	剥	剥				
剖	ボウ さく わかれる		剖	剖			剖	剖	剖
剩	ジョウ あまつさえ あまり あまる							剩	剩
剩								剩	剩
副	フク そう そえる		副	副	副		副	副	
				副			副		
							副		
							副		
割	カツ さく・わり ・わる・わ れる・きる	割	割	割	割	割	割	割	割
割		割					割	割	
		割					割		
		割					割		
		割					割		

平安中期 から 室町	江戸版本	康熙字典 1716年 部首・画数	弘道軒 四号	夏目漱石 坊っちゃん 明治39年	通用体活字 明治41～ 大正3年	漢字 整理案 大正8年	文部省 活字 昭和10年	当用 漢字表 昭和21年	太宰治 人間失格 昭和23年	当用漢字 字体表 昭和24年	教育漢字 平成4年	参考
剥	剥	剥	剥	剥			剥		剥			剥
剥	剥	剥	剥									
		剖	剖				剖	剖	剖			剖
剩	剩	剩	剩	剩			剩	剩	剩			剩
			副				副	副	副			副
割	割	割	割	割	割		割	割	割	割	割	割
割												割
割												

【割】通用体では偏を「害」ではなく「宀+土+口」を書く。説文の前後の時代の字体を見比べると、説文篆文の字体が特異なようだ。説文に倣った五経文字や康熙字典も特異な字体だ。「割」が一般的になるのは元の馮子振以降。途中に魏の鐘繇の「宣示表」が一例だけ「割」を書いているのは奇異に感じる。日本で「割」が見られるのは、平安時代の墨流本朗詠集。

※当用漢字字体表の下の○×は、複数の字体がある字種のうち昭和24年当時、岩田母型製造所での母型の有無を示す。



親字	音訓	甲骨文・金文・古文 (殷・西周・春秋・戦国)	説文解字 篆文	隸書 (秦・前漢・後漢)	草書	行書	楷書 (南北朝から初唐)	正字体 楷書	日本上代 から 平安初期
劍	ケン つるぎ 人②								王勃詩序
劍	常①								璽玉集
劍									性霊集
劍									性霊集
力	リョク リキ ちから つとめる 教1常①								法華義疏
加	カ くわえる くわわる 教4常①								王勃詩序
功	コウ くさお 教4常①								鄧普指歸
功									鄧普指歸
劣	レツ おとる 常①								鄧普指歸

【劍】当用漢字字体表から現在の常用漢字まで使われている「劍」は江戸時代に一般化された字体らしい。中国では清代が最初。ただし、「劍」の偏の字体は既に鎌倉時代の墨流本朗詠にある。中国では宋代の印刷本にある。当用漢字字体表が発表された時点で、岩田母型製造所には「劍」の字体の母

型はなく、印刷字体としては一般的ではなかったようだが、弘道軒清朝にはある。いつ作られたものだろうか。

【功】南北朝期は、劣を「刀」とする字体が多数派。これは書聖といわれる王羲之が誤字を書いた影響ではないだろうか。劣を「刀」とする字体を干祿字書は〈通〉としているが、五

平安中期 から 室町	江戸版本	康熙字典 1716年 部首・画数	弘道軒 四号	夏目漱石 坊っちゃん 明治39年	通用体活字 明治41~ 大正3年	漢字 整理案 大正8年	文部省 活字 昭和10年	当用 漢字表 昭和21年	太宰治 人間失格 昭和23年	当用漢字 字体表 昭和24年	教育漢字 平成4年	参考
												劍 劍
												劍 劍
												劍 劍
												劍 劍
												力
												力
												加 加
												加 加
												功 功
												功 功
												劣
												劣
												劣
												劣

経文字では〈訛〉と訂正している。

親字	音訓	甲骨文・金文・古文 (殷・西周・春秋・戦国)	説文解字 篆文	隸書 (秦・前漢・後漢)	草書	行書	楷書 (南北朝から初唐)	正字体 楷書	日本上代 から 平安初期
劫	ゴウ おびやかす 人①								光明皇后 薬教論
劫									光明皇后 出家立成
劫									
助	ジョ すけ たすかる たすける 教3常①								王勃詩序
努	ド つとめる ゆめ 教4常①								夫努丘萬墓誌
									招来目録
励	レイ はげます はげむ 常①								王勃詩序
勵									
勞	ロウ いたわる つかれる ねざらう 教4常①								王勃詩序
勞									聖武天皇集

【劫】干祿字書は「劫」を〈通〉、「劫」を〈正〉としている。五経文字は「劫」を示し解説に「……從刀者本之或體今經典並從力」とある。古代に或体の例はみつからないが、後漢の武氏祠画像題字に旁を「リ」とする例がある。

【助】古代から偏の一番下の横線を旁の下まで伸ばす字体が

あった。草書にもその字体によるものがあるが、草書では偏の一番下の横線を最後に書く。南北朝期は偏を「目」とした。五経文字に「從目訃」とある。日本でも偏を「目」とする靈が多数派で、漱石も太宰もその字体を書いている。

【努】古い使用例がみつからない。中国で最も古い使用例が

平安中期 から 室町	江戸版本	康熙字典 1716年 部首・画数	弘道軒 四号	夏目漱石 坊っちゃん 明治39年	通用体活字 明治41～ 大正3年	漢字 整理案 大正8年	文部省 活字 昭和10年	当用 漢字表 昭和21年	太宰治 人間失格 昭和23年	当用漢字 字体表 昭和24年	教育漢字 平成4年	参考
無量義經 節用		力5										千祿〈通〉 現代中国
黒流本朗詠 節用												
関戸本朗詠 書札節用文章		力5			教科書〈俗〉							助 現代中国
藤原行成 消息文鑑 尺牘楷様							明治の漢字					
元暦萬葉① 女大学		力5										北宋・蘇軾 現代中国
東寺観智院 本三堂絵詞	消息往来	力13				許容体						励 現代中国
藤原行成 益田本白詩	七夕	力10			國定教科書							勞 現代中国

孫過庭の「書譜」で7世紀末。日本での最古の使用例は「美勞丘萬墓誌」で8世紀の初め。篆書や隸書では「努」を使う。

【励】「勵」の「萬」を「万」にかえた字体。中国では宋代の印刷本に使われているが、書道字典には見えない。日本では江戸時代に多く使われる。弘道軒には「励」の字体しかない。

説文篆文では「勵」の字体のみ掲載。五経文字にも「勵」だけが掲載。康熙字典には「勵」と「勵」が異体字ではなく別々に掲載されている。

【勞】「火」二つを点三つに略するのは江戸時代から。

親字	音訓	甲骨文・金文・古文 (殷・西周・春秋・戦国)	説文解字 篆文	隸書 (秦・前漢・後漢)	草書	行書	楷書 (南北朝から初唐)	正字体 楷書	日本上代 から 平安初期
効	ガイ 常①								
効	コウ きく いたす ならう 教5常①								
効									
効	チョク いましめる みことのり 常①								
効									
効									
効									
効									
効	ボツ にわか におこ にわか 新①								
効									
効	ユウ いさむ いさまし 教4常①								
効									
効									

【効】武威漢簡では旁が「刀」。干禄字書では旁が「刃」の字体が〈道〉。干禄字書と五経文字では偏の最終2画が異なる。  
【効】古くは「交+支」だったようだ。後漢代には「支」は略されて「女」になっている。南北朝期には「効」が現れる。干禄字書では「効」と「効」の意味の使い分けが書いてあり、

別字という扱いになっているが、九経字様では「効」が親字で「効」は訛、つまり異体字としている。その九経字様にしても旁は「支」の略体の「女」が採用されている。歐陽詢は皇甫誕碑で「効」を九成宮體泉銘で「効」を書いている。日本では上代は「効」の使用例があるが、中世以降は使用例が

平安中期 から 室町	江戸版本	康熙字典 1716年 部首・画数	弘道軒 四号	夏目漱石 坊っちゃん 明治39年	通用体活字 明治41～ 大正3年	漢字 整理案 大正8年	文部省 活字 昭和10年	当用 漢字表 昭和21年	太宰治 人間失格 昭和23年	当用漢字 字体表 昭和24年	教育漢字 平成4年	参考



親字	音訓	甲骨文・金文・古文 (殷・西周・春秋・戦国)	説文解字 篆文	隸書 (秦・前漢・後漢)	草書	行書	楷書 (南北朝から初唐)	正字体 楷書	日本上代 から 平安初期
勝	ショウ かつ まさる たえる 教3常①		勝	勝	勝	勝	勝	勝	勝
勝				勝			勝	勝	
募	ボ つのる 常①		募	募			募	募	募
勸	カン すすめる 常①		勸	勸	勸	勸	勸	勸	勸
勸				勸			勸	勸	
勢	セイ いきおい 教5常①		勢		勢		勢	勢	勢
勢							勢	勢	
勳	クン いさお 常①		勳	勳	勳	勳	勳	勳	勳
勳	人②		勳	勳			勳	勳	
							勳		

平安中期 から 室町	江戸版本	康熙字典 1716年 部首・画数	弘道軒 四号	夏目漱石 坊っちゃん 明治39年	通用体活字 明治41～ 大正3年	漢字 整理案 大正8年	文部省 活字 昭和10年	当用 漢字表 昭和21年	太宰治 人間失格 昭和23年	当用漢字 字体表 昭和24年	教育漢字 平成4年	参考
勝	勝	勝	勝	勝	勝		勝	勝	勝	勝	勝	勝
勝		勝	勝	勝								勝
	募	募		募			募	募	募	募		募
勸	勸	勸	勸	勸	勸	勸	勸	勸		勸		勸
	勸			勸				(勸)				
	勢	勢	勢	勢	勢	勢	勢	勢	勢		勢	勢
	勢			勢	勢				勢		勢	
勳	勳	勳	勳		勳	勳	勳	勳	勳	勳	勳	勳
		勳			勳							

【勝】干祿字書で偏の「月」の中が横線なのを五経文字で点に訂正している。康熙字典も文部省活字も同様に点。当用漢字表もこの図版でははっきりしないが点であったとされる。

【募】康熙字典ではこの字のくさかんむりを4面に数える。

【勢】説文篆文にはなく、新附で追加された。左上の部分に

様々な字体がある。

【勳】「員」に従う字体があり、後にもまれに書かれることがある。

【勺】勺<sup>1</sup>勺<sup>2</sup>勺<sup>2</sup>勺<sup>2</sup>勺<sup>2</sup>

親字	音訓	甲骨文・金文・古文 (殷・西周・春秋・戦国)	説文解字 篆文	隸書 (秦・前漢・後漢)	草書	行書	楷書 (南北朝から初唐)	正字体 楷書	日本上代 から 平安初期
勺 常→人①	シャク								粟津萬象名義
勾 人→新①	コウ まがる とらえる								
勺 教5常①	ク								法華義疏
									聶晉指歸
勺 人→新①	におい におう								
勿 人①	モチ ブツ なかれ なし								准武天皇雜集
勿 常→人①	もんめ								

【勺】もとは「勺」の異体字だったようである。干祿字書は「勺」を〈通〉、「勺」を〈正〉としている。「勺配」の「勺」という用法は江戸期になって見られる。江戸期には「勺」の「口」を点とする字体の使い分けも現れる。江戸期は「勺」と「勺」の字体が衝突する。北魏では「勺」の字種として「勺」

の字体を使うことが圧倒的多数派だが唐代になると「勺」の字体は見えず、「勺」に統一されている。法華義疏は「勺」の字体を書いているので唐代よりも古い時代の字体の影響を受けていると思われる。

【勺】国字。平安時代以降に使用例が確認できる。小野道風

平安中期 から 室町	江戸版本	康熙字典 1716年 部首・画数	弘道軒 四号	夏目漱石 坊っちゃん 明治39年	通用体活字 明治41～ 大正3年	漢字 整理案 大正8年	文部省 活字 昭和10年	当用 漢字表 昭和21年	太宰治 人間失格 昭和23年	当用漢字 字体表 昭和24年	教育漢字 平成4年	参考

「屏風土台」では「勺」の字体を書いている。

【勺】国字。江戸時代以降に使用例が確認できる。文部省活字では「勺」の部首に分類されている。2010年に常用漢字からはずされ人名用漢字になった。

※当用漢字字体表の下の○×は、複数の字体がある字種のうち昭和24年当時、岩田母型製造所での母型の有無を示す。

親字	音訓	甲骨文・金文・古文 (殷・西周・春秋・戦国)	説文解字 篆文	隸書 (秦・前漢・後漢)	草書	行書	楷書 (南北朝から初唐)	正字体 楷書	日本上代 から 平安初期
包	ホウ つつむ								篆隸萬象名義
包									信行禪師碑
化	カケ ぼかす ぼける かわる								法華義疏
化									王勃詩序
北	ホク きた にげる								法華義疏
									王勃詩序
									元有墓誌
匙	シ セ ギ								
匣	ソウ								顏魯公入 交名帳
市									無量義經
									篆隸萬象名義
									佚名白詩

平安中期 から 室町	江戸版本 1716年 部首・画数	弘道軒 四号	夏目漱石 坊っちゃん 明治39年	通用体活字 明治41~ 大正3年	漢字 整理案 大正8年	文部省 活字 昭和10年	当用 漢字表 昭和21年	太宰治 人間失格 昭和23年	当用漢字 字体表 昭和24年	教育漢字 平成4年	参考
											包 現代中国
											化 現代中国
											北 現代中国
											匙 現代中国
											匣 現代中国

【包】正字は「包」で、隸書でも「包」。唐代以降は「包」「匚」どちらの字体も書かれてきた。当用漢字表では「包」だが当用漢字字体表で「匚」に変更された。変更する必要があったのだろうか。当用漢字字体表の発表時点で岩田母型に「匚」の字体はなかった。

【化】古代の文字および説文篆文に照らせば「化」ではなく「匕」が正字であり、手書きでも正字が多く書かれてきた。康熙字典の字体は不自然。  
【北】手書き書体で、偏の縦線が下に突き出ることはない。正字体の多い文部省活字でさえ偏の縦線は下に出ていない。当

用漢字字体表の字体は康熙字典など明朝体の字体である。  
【匣】「市」が元の字らしい。南北朝期に「市」に「しんにょう」が加わった異体字が現れる。「匣」は「しんにょう」を「L」のように書いたものと「市」の1画目の横線とが合体して「匚」と解釈されたものだろう。

親字	音訓	甲骨文・金文・古文 (殷・西周・春秋・戦国)	説文解字 篆文	隸書 (秦・前漢・後漢)	草書	行書	楷書 (南北朝から初唐)	正字体 楷書	日本上代 から 平安初期
匡	キョウ ただす 人①								聖武天皇雜集
									聖武天皇雜集
匠	ショウ たくみ 常①								法華義疏
									聖武天皇雜集
									聖武天皇雜集
									聖武天皇雜集
匪	ヒ ①								聖武天皇雜集
									聖武天皇雜集
区	ク 教3常①								王勃詩序
									王勃詩序
匹	ヒツ ひき たくい 常①								聖武天皇雜集
									聖武天皇雜集
疋	ひき あし 人①								聖武天皇雜集
									聖武天皇雜集

平安中期 から 室町	江戸版本	康熙字典 1716年 部首・画数	弘道軒 四号	夏目漱石 坊っちゃん 明治39年	通用体活字 明治41~ 大正3年	漢字 整理案 大正8年	文部省 活字 昭和10年	当用 漢字表 昭和21年	太宰治 人間失格 昭和23年	当用漢字 字体表 昭和24年	教育漢字 平成4年	参考
												匡 現代中国
												匠 千祿<俗> 現代中国
												匪 現代中国
												区 現代中国
												匹 千祿<俗> 現代中国
												疋 五経<説> 「足」郭店楚簡 「足」説文

【匡】南北朝以降は「主+L」の字体が多数派。  
 【匠】中国の南北朝から日本の中世まで「匚」の「L」を「乚」と誤った字体が多数派。  
 【匹】「L」を「乚」と誤った字体がある。「疋」と「匹」は異体字として扱われることがある。五経文字では「疋」を<説>

としている。現代中国では「疋」と「匹」を統合して「匹」のみを使う。「疋」は「足」と字体が同じになることがある。江戸版本に「区」の字体がある。

親字	音訓	甲骨文・金文・古文 (殷・西周・春秋・戦国)	説文解字 篆文	隸書 (秦・前漢・後漢)	草書	行書	楷書 (南北朝から初唐)	正字体 楷書	日本上代 から 平安初期
医	イ いやす		醫	醫	醫	醫	醫	醫	醫
醫			醫	醫		醫	醫	醫	醫
匿	トク かくす かくれる		匿	匿	匿	匿	匿	匿	匿
十	ジュウ ジツと とお		十	十	十	十	十	十	十
千	セン ち		千	千	千	千	千	千	千

平安中期 から 室町	江戸版本	康熙字典 1716年 部首・画数	弘道軒 四号	夏目漱石 坊っちゃん 明治39年	通用体活字 明治41~ 大正3年	漢字 整理案 大正8年	文部省 活字 昭和10年	当用 漢字表 昭和21年	太宰治 人間失格 昭和23年	当用漢字 字体表 昭和24年	教育漢字 平成4年	参考
醫	醫	醫	醫		医	医	醫	医	醫	医	醫	医
醫	医	医	医		医		醫	医			醫	医
					医							
					医							
					医							
匿	匿	匿	匿				匿	匿	匿	匿	匿	匿
十	十	十	十	十			十	十	十	十	十	十
千	千	千	千	千			千	千	千	千	千	千

【医】「医」と「醫」はもともとは別字。「醫」の略体が「医」と字体衝突した。「醫」の略体として「医」を使うのは江戸期からか。江戸版本では「医」が大多数。干禄字書では「巫」に従う字体を〈通〉としているが、五経文字では〈俗〉としている。文部省活字は「醫」だが、太宰治は『人間失格』の

直筆原稿中、「醫」を1回、「医」を7回使っているところを見ると、略体の「医」は学校教育とは別にかなり浸透していたと推定できる。

【十】<sup>2</sup>午<sup>2</sup>升<sup>3</sup>半

親字	音訓	甲骨文・金文・古文 (殷・西周・春秋・戦国)	説文解字 篆文	隸書 (秦・前漢・後漢)	草書	行書	楷書 (南北朝から初唐)	正字体 楷書	日本上代 から 平安初期
午	ゴウマ 教2常①								
升	ショウ ますのほる 常①								
半	ハン なかば 教2常①								

平安中期 から 室町	江戸版本 1716年 部首・画数	弘道軒 四号	夏目漱石 坊っちゃん 明治39年	通用体活字 明治41~ 大正3年	漢字 整理案 大正8年	文部省 活字 昭和10年	当用 漢字表 昭和21年	太宰治 人間失格 昭和23年	当用漢字 字体表 昭和24年	教育漢字 平成4年	参考
											午 現代中国
											升 五経文字(詠) 現代中国
											半 現代中国

【升】南北朝以降は咎なし点が付くことが多い。逆にいうと隸書には咎なし点は付かない。  
【半】漢字整理案に字典体と標準体の別がある。当用漢字字体表で標準体が採用されたが、岩田母型製造所にはその字体の母型がなく、新刻された。

※当用漢字字体表の下の○×は、複数の字体がある字種のうち昭和24年当時、岩田母型製造所での母型の有無を示す。

【十】協卒卓卑

親字	音訓	甲骨文・金文・古文 (殷・西周・春秋・戦国)	説文解字 篆文	隸書 (秦・前漢・後漢)	草書	行書	楷書 (南北朝から初唐)	正字体 楷書	日本上代 から 平安初期
協	キョウ かなう								
協									
悒									
卒	ソツ おわる ついに にわか								
卒									
卒									
卒									
卒									
卒									
卓	タク								
卓									
卓									
卑	ヒ いやしい いやしむ いやしめる								
卑									
卑									
卑									

平安中期 から 室町	江戸版本	康熙字典 1716年 部首・画数	弘道軒 四号	夏目漱石 坊っちゃん 明治39年	通用体活字 明治41~ 大正3年	漢字 整理案 大正8年	文部省 活字 昭和10年	当用 漢字表 昭和21年	太宰治 人間失格 昭和23年	当用漢字 字体表 昭和24年	教育漢字 平成4年	参考
												協 現代中国
												卒 千祿<通> 現代中国
												卓 現代中国
												卑 九経<説> 現代中国

【協】五経文字では「協」を訛とはせず、「心部亦有協字與此同並訓和案」としている。  
 【卒】南北朝に「卒」から異体字の「卒」ができる過程がよくわかる。  
 【卓】石門頌では伸ばす線がまだ1本に統一されていない。

【卑】金文では「田+支」だが、説文では「甲+又」になっている。「支」の上部を「田」と合体させて「甲」にしている。この角が「甲」に角がついているが、説文では「甲」単体の字にも角がついているので、これは字画ではなく説文の様式なのかかもしれない。この角を字画として書いたものは

説文以降もなかったが、字画として解釈したものが康熙字典の字体に採用されている。九経字様は「甲+又」としているが甲の下部の縦線をまっすぐに書いている。これは説文篆文と見比べるとおかしな解釈だともう。説文篆文を正字の根拠とするなら、正字は常用漢字の「卑」ではなく、人名用漢字の「卑」の方だろう。中国常用も「卑」を採用している。

親字	音訓	甲骨文・金文・古文 (殷・西周・春秋・戦国)	説文解字 篆家	隸書 (秦・前漢・後漢)	草書	行書	楷書 (南北朝から初唐)	正字体 楷書	日本上代 から 平安初期
単	タン ひとえ								法華義疏
單	人②								王勃詩序
									杜家立成
南	ナン みなみ								王勃詩序
卑	ヒ いやしい いやしむ ひくい								王勃詩序
卑	人③								龔替指歸
博	ハク バク ひろい ひろめる								王勃詩序

【卑】金文では「田+支」だが、説文では「甲+又」になっている。「支」の上部を「田」と合体させて「甲」にしてしまったのだろう。「甲」に角がついているが、説文では「甲」単体の字にも角がついているので、これは字画ではなく説文の様式なのかもしれない。この角を字画として書いたものは

説文以降もなかったが、字画として解釈したものが康熙字典の字体に採用されている。九経字様は「甲+又」としているが甲の下部の縦線をまっすぐに書いている。これは説文篆文と見比べるとおかしな解釈だともう。説文篆文を正字の根拠とするなら、正字は常用漢字の「卑」ではなく、人名用漢

平安中期 から 室町	江戸版本	康熙字典 1716年 部首・画数	弘道軒 四号	夏目漱石 坊っちゃん 明治39年	通用体活字 明治41～ 大正3年	漢字 整理案 大正8年	文部省 活字 昭和10年	当用 漢字表 昭和21年	太宰治 人間失格 昭和23年	当用漢字 字体表 昭和24年	教育漢字 平成4年	参考
單	單	單	單	單			單	單	單	單	單	單
色紙法華經⑧	商先往來	口9										江戸千祿(俗) 現代中国
單	單		單	單								
色紙法華經⑧	書札重宝記											
單												
藤原定家												
南	南	南	南	南			南	南	南	南	南	南
精養本朗詠	節用	十七										現代中国
元永本古今	再版農業全書		南	南								
元永本古今			南	南								
元永本古今			南	南								
元永本古今			南	南								
元永本古今			南	南								
元永本古今			南	南								
藤原朝隆	謹身往來	十六	卑	卑	卑	卑	卑	卑	卑	卑	卑	卑
藤原朝隆	謹身往來											九経<詠> 現代中国
佚名白詩	節用		卑	卑								
佚名白詩			卑	卑								
佚名白詩			卑	卑								
佚名白詩			卑	卑								
佚名白詩			卑	卑								
花園天皇	謹身往來	十	博	博	博	博	博	博	博	博	博	博
花園天皇	謹身往來											干祿<通> 現代中国
後家 純消息往來			博	博								

字の「卑」の方だろう。中国常用も「卑」を採用している。  
【博】右上の点はつけないことの方が多くいる。説文篆文を見ても、どうしても点をつけないと見えない。干祿字書の字体を五経文字で訂正している。

親字	音訓	甲骨文・金文・古文 (殷・西周・春秋・戦国)	説文解字 篆文	隸書 (秦・前漢・後漢)	草書	行書	楷書 (南北朝から初唐)	正字体 楷書	日本上代 から 平安初期
卜	ボク うらない うらなう ぼくのと								
占	セン うらなう しめる うらない								
卦	ケカ うらかた								
卯	ボウ う								
卯									

平安中期 から 室町	江戸版本	康熙字典 1716年 部首・画数	弘道軒 四号	夏目漱石 坊っちゃん 明治39年	通用体活字 明治41~ 大正3年	漢字 整理案 大正8年	文部省 活字 昭和10年	当用 漢字表 昭和21年	太宰治 人間失格 昭和23年	当用漢字 字体表 昭和24年	教育漢字 平成4年	参考

親字	音訓	甲骨文・金文・古文 (殷・西周・春秋・戦国)	説文解字 篆文	隸書 (秦・前漢・後漢)	草書	行書	楷書 (南北朝から初唐)	正字体 楷書	日本上代 から 平安初期
印	イン しるし								豊替指歸
危	キ あぶない あやうい あやぶむ								杜家立成
危									豊替指歸
却	キャク かえって しりぞく しりぞける								王勃詩序
卻									
即	ソク すなわち たとえ つく もし								王勃詩序
卽									

平安中期 から 室町	江戸版本	康熙字典 1716年 部首・画数	弘道軒 四号	夏目漱石 坊っちゃん 明治39年	通用体活字 明治41~ 大正3年	漢字 整理案 大正8年	文部省 活字 昭和10年	当用 漢字表 昭和21年	太宰治 人間失格 昭和23年	当用漢字 字体表 昭和24年	教育漢字 平成4年	参考
												印 現代中国
												危 現代中国
												却 現代中国
												即 現代中国

【印】行書の偏は横線2本を書き「レ」を書くのが一般的な書き順。したがって偏の縦線は下に突き抜けない。一画目は左から右に書く。平安以降は各なし点をつけることが多い。  
【却】「卻」の異体字で五経文字や康熙字典では俗字とされているがその出現は早く、漢代にまでさかのぼる。文部省活字

も俗字を採用している。旁を「卩」と誤ったものも多い。  
【即】漢代の隸省/隸変である。康熙字典には「卽今作卽」とある。開成石経でもこの字体が使われている。文部省活字もこの字体を採用している。漱石は正字と通字の折衷のような字体を書いている。

親字	音訓	甲骨文・金文・古文 (殷・西周・春秋・戦国)	説文解字 篆文	隸書 (秦・前漢・後漢)	草書	行書	楷書 (南北朝から初唐)	正字体 楷書	日本上代 から 平安初期
卵	ラン たまご 教6常①								九経字様 篆隸萬象名義
									類聚古集①
卷	カン まき 人②								元彦墓誌 等慈寺碑 干祿<序> 法華義疏
卷	教6常①								居延漢簡 劉熹碑 出曜経注解 五経文字 王勃詩序
									鄭義下碑 優婆塞戒業 論之奈
卸	シャ おろし おろす 常①								古文尚書⑤ 江戸干祿 王勃詩序
									五経文字
卸	キヤク かえって しりぞく しりぞける ②								説文篆文 馬王堆 史晨前碑 万歳通天通帖 大観帖 金光明経② 漢書蕭望之伝 五経文字 王勃詩序
却	常①								居延漢簡 摩訶般若波羅蜜経 等慈寺碑
									武威漢簡
卸	ソク すなわち つく もし 人③								甲骨 史頌殷 郭店楚簡 説文篆文 馬王堆 石門頌 十七帖 集字聖教序 論経書詩 等慈寺碑 開成石経 王勃詩序
卸	常①								甲骨 金文 中山王方壺 乙瑛碑 高貞碑
									大孟鼎 金文

【卵】複数の字典に九経字様の例が載っているが、官板の九経字様には見えない。西安の石碑にはあるのだろうか。

【卷】唐代の正字体と康熙字典の字体が一致しない。現代中国は康熙字典の字体を採用。当用漢字字体表—常用漢字の字体は使用例が少ないようだ。鄭義下碑、法華義疏、筋切の字

体の由来がわからない。

【卸】江戸干祿では、偏を「垂」としたものを<正>とし、偏の下部を「山」とするものを<通>としているが、五経文字では、「卸」を正字として修正している。漱石は江戸干祿に掲載の2種の字体を書いている。漱石は干祿字書を持っていた

平安中期 から 室町	江戸版本 1716年 部首・画数	康熙字典 1716年 部首・画数	弘道軒 四号	夏目漱石 坊っちゃん 明治39年	通用体活字 明治41~ 大正3年	漢字 整理案 大正8年	文部省 活字 昭和10年	当用 漢字表 昭和21年	太宰治 人間失格 昭和23年	当用漢字 字体表 昭和24年	教育漢字 平成4年	参考
												卵 現代中国
												卷 現代中国
												卸 江戸干祿<通> 現代中国
												却 五経<俗> 現代中国
												卸 正始石経
												卸 現代中国
												卸 教科書<俗>

のかもしれない。

【卸】「却」は「卸」の異体字で五経文字や康熙字典では俗字とされているがその出現は早く、漢代にまでさかのぼる。文部省活字も俗字を採用している。旁を「卩」と誤ったものも多い。

【卸】「卸」は、漢代の隸省／隸変である。康熙字典には「卸今作卸」とある。開成石経でもこの字体が使われている。文部省活字もこの字体を採用している。漱石は正字と通字の折衷のような字体を書いている。

親字	音訓	甲骨文・金文・古文 (殷・西周・春秋・戦国)	説文解字 篆文	隸書 (秦・前漢・後漢)	草書	行書	楷書 (南北朝から初唐)	正字体 楷書	日本上代 から 平安初期
卿	キョウ ケイ								
卿									
卿									
厄	ヤク わざわい								
厚	コウ あつい								
厘	リン								
塵	テン みせ やしき								
釐	リ おさめる								

【卿】説文篆文に従えば「卿」になるはずだが、そのような字体は五経文字の他にみつからない。漢代から「卿」を書いており、干祿字書も日本の文部省活字もそれに倣っている。康熙字典は「卿」を採用しているが、「即」の字種では「即」を採用しており、一貫していない。官板五経文字の〈石経〉と

されている字体には「尸」の中に点があるが、これは誤りではないだろうか。『五體字類』(3版)では「尸」の中の点を省いている。  
【厄】五経文字の親字ではなく説明にこの字が使われている。  
【厘】「厘」「塵」「釐」が同字種の異体字なのか、別字なのか。

平安中期 から 室町	江戸版本	康熙字典 1716年 部首・画数	弘道軒 四号	夏目漱石 坊っちゃん 明治39年	通用体活字 明治41~ 大正3年	漢字 整理案 大正8年	文部省 活字 昭和10年	当用 漢字表 昭和21年	太宰治 人間失格 昭和23年	当用漢字 字体表 昭和24年	教育漢字 平成4年	参考
												卿 現代中国
												厄 現代中国
												厚 現代中国
												厘 現代中国
												釐 江戸干祿俗

古代には「厘」にあたる字体は見えない。王羲之が宋搨祖石経帖で草書の「釐」を書いているが、字体は「厘」のようなので、「釐」の草書から「厘」ができたとも考えることもできる。北魏では「塵」の字種に「土+厘」を書いたり、「厘」を書いたりしている。官板干祿字書では「厘」と「塵」を同字

種、「釐」は別字としている。康熙字典は「厘」の項に「俗作釐省非」とある。漢字要覧では「物ノ数量ヲ記スル時ニ限リテ、別體ヲ用キルモ妨ナシ」とし「厘」は「釐」の異体字の特別な用法とする。明治の漢字も「厘」を「釐」の許容とする。陸軍幼年学校用事便覧は「實ハ別字」とする。



